

◆四十九日までの法要

仏教では、亡くなってから七日ごとに法要をおこないます。初七日法要は、東日本では故人様が亡くなった日から数えて七日目、西日本では亡くなった前の日から数えて七日目におこなうのが一般的だといわれています。しかし、最近は、お葬式当日に繰り上げておこなわれるのが一般的になりました。その後は、次のように続きます。

- ・ 十四日目……………二七日(ふたなのか)
- ・ 二十一日目……………三七日(みなのか)
- ・ 二十八日目……………四七日(よなのか)
- ・ 三十五日目……………五七日(いつなのか)
- ・ 四十二日目……………六七日(むなのか)
- ・ 四十九日……………七七日(しちしちにち)



◆忌明け法要の準備

仏教では、亡くなった日から四十九日まで、七日ごとに忌み日があります。忌み日とは、死後、七七日(四十九日)まで七日ごとに追善供養をする日のことで、四十九日には忌み日が終わったとして「忌明け」の法要を営みます。この日は、満中陰とも呼ばれます。七七日は、初七日と並ぶ重要な忌み日で、僧侶、親族、故人の友人・知人、葬儀のときにお世話になった方々などを招きます。法要後には、忌明けの宴を催します。

また、納骨もこの日におこなうのが一般的です。

忌明け法要では、案内から会食(お斎)、粗供養の用意など、実にさまざまな準備が必要です。